

アカウンテイング・アナリティクスの新潮流

宮西 賢次

現在、多くの大学でデータサイエンス分野の教育研究プログラム

の導入が進んでいる。筆者が所属する滋賀大学でも、2017年に日本初となるデータサイエンス学部を設立し、「数理及びデータサイエンスに係る教育強化」の拠点校として文部科学省に選定されている。わが国でいち早く文理融合教育を実現させるため、新たに価値創造科目を導入し、データサイエンス学部と経済学部の学生がともに学べる体制となっている。

滋賀大学経済学部では、経済学、簿記会計、統計学などを早い時期からコア科目として設定し、数量分析系の科目を重視した学際的カリキュラムを構築してきた。現在は、データサイエンス副専攻の制度も導入し、プログラミングや統計数理系科目、データ分析の演習

科目も履修できるように進化させている。

筆者が専門とする財務諸表分析や企業価値評価の分野は、会計とコーポレート・ファイナンスの学際分野である。古くからデータ分析が盛んに応用されてきた分野であるが、近年は、教育面でも分析的なトレーニングが再び脚光を浴びつつある。クロスセクション分析や時系列分析、線形・非線形の回帰モデル、判別関数モデル、主成分分析や因子分析、クラスター分析などの多変量解析、AI手法などの多様な手法が応用され、欧米のMBAプログラムでの教育にも導入されている。滋賀大学のデータサイエンス学部や経済学部生向けに提供している財務諸表分析演習の講義やゼミナールでも、RやPythonを用いたデータ分析

を標準装備し、欧米の大学で導入が進むアカウンテイング・アナリティクスの内容をいち早く導入している。

他方では、世界的に深刻化するコロナ禍の影響から、昨年からの大学の講義も大半がリモート授業に切り替わり、大学が構築した学習管理システムや市販のリモート会議システムを活用したオンラインでの授業が一気に進んだ。講義は対面だという思い込みが、少なくとも大学では一瞬にして崩れ去ったと、ここ1年の変化を振り返って実感している。筆者の担当科目でも、データの共有やプログラミングもリモートでリアルタイムに処理している。従来は民間企業から講師を招いて実施していた財務データベースの講習会などもリモート開催し、オンデマンドでも

アクセスできるような工夫するなど、むしろ対面での授業を越える。また、海外のビジネスパーソンを交えた英語によるリモート授業も短期間のうちに実現した。

コロナ禍はあらゆる分野でDX（デジタルトランスフォーメーション）を加速し、大学教育の現場でも教育内容と教育方法の双方に変化をもたらしつつある。さまざまな自動分析システムも次々開発されるなか、分析的な会計教育の重要性はますます高まっている。データサイエンスの分析手法やアウトプットを的確に理解し、財務データの分析を実践するためのアカウンテイング・アナリティクス教育へのシフトも今後はさらに加速し、ビジネス分野の多様な学位プログラムに組み込まれていくだろう。

を標準装備し、欧米の大学で導入が進むアカウンテイング・アナリティクスの内容をいち早く導入している。



宮西 賢次(みやにし・けんじ)
滋賀大学経済学部会計情報学科 准教授

大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程および博士後期課程を経て滋賀大学に着任。その後、フルブライト奨学生として米国ノースウェスタン大学 J.L.Kellogg Graduate School of Management, Ph.Dプログラムに留学、現在に至る。「テクノロジー駆動型不正会計検出システムの構築に向けて」(PwC's View Vol.14, 2018年)